○荒田村の寺

六郡郡邑記によると、荒田村には寺一軒、山伏二軒とあるが、菅江真澄は修験は清水寺のみで、郡邑記の筆記は誤りであろうといつている。花岳山太寧寺は弘治（一五五五～一五七七）、永祿（一五五八～一五七九）の頃無住であつたのを、小山の善宝寺の八世にあたる一山宗法和尚が来てこの寺を再興した。時は天正四年（一五七六）の頃とか。

その頃毎夜、寺の下なる渕より怪光が飛び、静かな渕はそれとともに荒波をたて、なまぐさい風とともに変化が大法師となつて、和尚の草房に入り禅問答を始めるのであつた。ある夜もかの大法師が草房に現われ和尚にむかつてきた。和尚は結跏趺坐し半眼にてはたと大法師をにらみつけた。大法師は和尚に向かつて問うに、「大脚二足小脚八脚、日月一天をにらみ、行ときは横行自在也、是なにものぞ」。これを聞いた和尚は大笑していわく、「大足二足はさみなり、小脚八脚は両足なり、天をにらむ日月はすなわち両眼で、横行自在するものは、蟹にあらずや」といつて、手にした如意をもつてはつたと打ちおろした。すると光とともにその妖化は消え失せてしまつた。

やがて夜もあけたので付近をさがしてみたら、大きな大きな蟹が甲を破られて渕で死んでいたという。この蟹は数多くの僧を喰い殺した年老いた大蟹で、そのためこの寺に住む僧がおらなかつたという。和尚は渕より蟹をひきあげ、塚を作つて埋めた。この塚をカニ塚、蟹の住んでいた渕をカニ渕といい、後にカニ塚には小祠をたてカニ大明神をまつつたという。

（淀　川）